

韓国人のパーソナル・スペースに関する一考察

曹, 美庚

九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門 : 准教授 : 対照言語学、異文化コミュニケーション、e-Learning

<https://doi.org/10.15017/13965>

出版情報 : 言語文化論究. 24, pp.29-45, 2009-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

韓国人のパーソナル・スペースに関する一考察

曹 美 庚

1 はじめに

人間は他人と対面コミュニケーションを行う際に、その相手や状況によって適切な一定の距離を保とうとする。この種の現象は、対人距離と社会空間に関する研究や個人空間 (personal space) に関する研究等において取り扱われることが多かった。曹 (2008) によれば、日本人はタッチ (あるいは、スキンシップ) を伴うコミュニケーションを好まない傾向がある反面、韓国人は歩くときや隣に座って話をするときなどに、言語以外にタッチ (あるいは、スキンシップ) を伴うコミュニケーション方法をとることが多い。韓国人のコミュニケーション距離については、曹 (2001) において「ゼロ・ディスタンス論」が展開されているが、そこでは、親密感の高い間柄ほど対人距離が近く、パーソナル・スペースが小さい傾向にあることが指摘されている。

本研究では、日本人と韓国人のパーソナル・スペースの広さに相違があることを実証するための研究の一環として、20歳前後の韓国人大学生を対象に、コミュニケーション相手との間で気楽に感じる距離について調べ、その結果をもとにパーソナル・スペースの形態を把握することを狙いとしている。パーソナル・スペースを測る方法としては、質問票や質問票による間接実験、写真投影や直接距離を測る直接実験等があるが、ここでは質問票調査の方法を採用している。

2 先行研究とパーソナル・スペースの概念

パーソナル・スペースは、個人の身体を直接に取り巻く目で見ることのできない空間領域であり、人はこの空間を持ち運びながら社会生活を営んでいると考えられる (渋谷 (1985), 41頁)。仮に、自分のパーソナル・スペース内に他人が入り込んだとき、われわれは緊張感や警戒心を高めたり、不快感を覚えたりするのである。

渋谷 (1985) のレビューによれば、パーソナル・スペースという概念は、動物行動学のスペーシング (spacing; 個体間の空間を空けること) という概念に起因しているという。このスペーシングの考え方をもとに、Hediger (1950) は、動物行動学の見地から、スペーシング維持のために用いられる距離を、逃走距離 (flight distance)、臨界距離 (critical distance)、個体距離 (personal distance)、社会距離 (social distance) の4つに分類している。前2者は異種個体間で用いられる距離で、後2者は同種個体間で用いられる距離である。また、文化人類学者のHall (1966) は、こうした動物の同種個体間に見られる距離帯が人間にも存在することを確認し、個体間の距離が大きくなるにつれて、密接距離 (intimate distance)、個体距離 (personal distance)、社会距離 (social distance)、公衆距離 (public distance) といった4つの距離帯が識別できることを主張している。

さらに、渋谷 (1976) は、2人の男子大学生の全身写真像と実際の実験から、2人の男性が作る社会空間は、2人の身体方向、2者間の距離、2者間の関係に規定されることを検証している。そ

の後の渋谷（1985）の研究では、質問票と直接実験により日本人のパーソナル・スペースの測定を行い、異性に対するパーソナル・スペースは同性に対するパーソナル・スペースより大きく、未知の人に対するパーソナル・スペースは既知の人に対するパーソナル・スペースより大きいこと、そして、20歳前後の女性ペアのパーソナル・スペースは他のペアに比べてもっとも小さいことなどを明らかにしている。

また、曹（2008）は、パーソナル・スペースの概念をコミュニケーション距離という観点から取り上げ、さまざまなコミュニケーションの場面において、コミュニケーション当事者間に保たれる距離を測定している。その結果、スキンシップに対する許容度が高いほどコミュニケーション距離は短く、親密感の薄いグループほどコミュニケーション距離が長いことを明らかにしている。

もっとも、渋谷（1985）によれば、人間の場合に見られる「スペーシング」には、人と人との間の距離の概念を用いる場合と人を取り巻く空間の概念を用いる場合があり、前者では対人間距離（interpersonal distance）が、後者ではパーソナル・スペースの用語が該当するとしながらも、従来の研究では、両用語の概念の違いは明確にされておらず、対人間距離に相当するものであってもパーソナル・スペースによって解釈されている研究もあることから、両用語には本質的な違いはないとし、パーソナル・スペースは対人間距離をも含む広い意味で用いられていることを示唆している（渋谷（1985）、42頁）。

そこで、本稿では、渋谷（1985）の見解に基づき、パーソナル・スペースという概念を対人間距離をも含む広い意味で捉えることにしたい。そして、パーソナル・スペースが相対的に狭いとされる20歳前後の大学生を対象に質問票調査を実施し、他人といる時に気楽に感じる距離を測定することで、後述するように、相手との親密度合いによってパーソナル・スペースの大きさに相違があるという結論を導いている。

3 質問票調査の概要と分析

3.1 質問票調査の概要

本調査は、韓国に所在する釜山大学・慶北大学・大邱カトリック大学の大学生を対象に、2007年11月末から2008年3月下旬までの間に行われた。200部の質問票を配布し、196部を回収したので、回収率は98%である。そのうち、中国国籍のものが5部、記録もれによる欠損が2部あり、189部が有効回答であった。回答者の男女比率は、男子大学生が117名（62%）で、女子大学生が71名（38%）を占め、性別不明の回答が1名あった（図表1）。女子学生の回答比率が相対的に少ないことから、男女比率に若干アンバランスがあったといえる。

図表1 回答者の男女比率

	男子大学生	女子大学生	性別不明	合計
有効回答数	117	71	1	189
比率	61.9%	37.6%	0.5%	100%

質問票では、「人といる時に気楽に感じる距離」について、多様な相手を想定した質問を行い、20歳前後の男女の大学生が想定するパーソナル・スペースの広さを測定している。分析に当たっては、親密感の高低によってグループ分けを行い、各々のグループごとに、同性あるいは異性のコミュニケーション相手との間にどの程度の距離が気楽に感じる距離であるかを分析している。

3. 2 異性の相手に対するパーソナル・スペース

異性の相手が隣にいる時、気楽に感じる距離について調査した結果は図表2のとおりである。異性の相手としては多様な間柄が考えられるが、ここでは、親、兄弟・姉妹、友人、親しい知り合い、普通の知り合い、初対面の全く知らない人、などを想定している。また、気楽に感じる距離についても、20cm刻みの具体的な数値で範囲を指定し、回答者に選択させるという方法をとっている。

図表2 異性の人といる時に気楽に感じる距離

異性の相手	平均値	標準偏差	n	グループ分け
親	2.49	1.536	188 (欠損1)	親密感の 高いグループ
年上の兄弟・姉妹	2.37	1.451	189	
年下の兄弟・姉妹	2.30	1.424	188 (欠損1)	
友人 (パートナーか親友)	1.59	1.010	189	
年上の親しい知り合い	1.86	1.017	189	
年下の親しい知り合い	1.82	0.967	189	
年上の普通の知り合い	2.51	1.239	188 (欠損1)	親密感の 薄いグループ
年下の普通の知り合い	2.42	1.171	189	
年上の全く知らない人	3.23	1.554	189	
年下の全く知らない人	3.15	1.509	189	

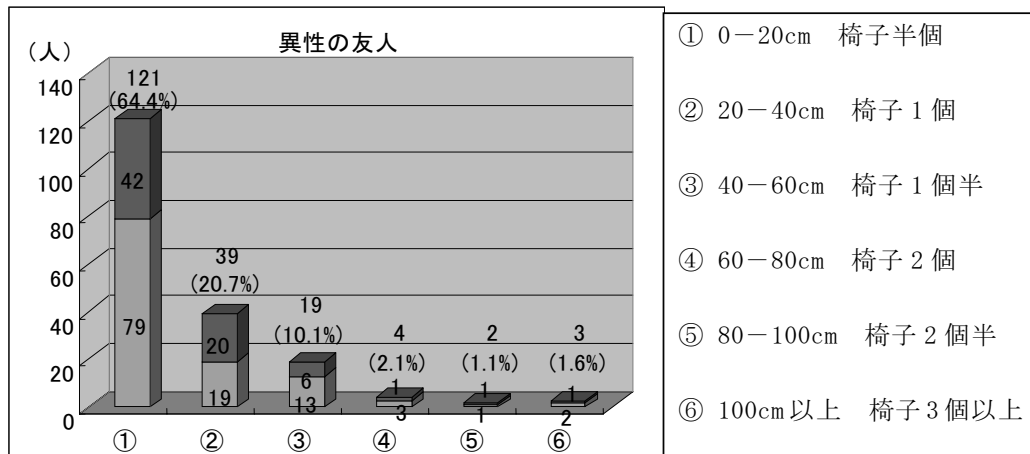
注) 尺度は、次のような6ポイント・スケールを用いている。以下、同じ。

- 1: 0-20cm (椅子半個)、2: 20-40cm (椅子1個)、3: 40-60cm (椅子1個半)、
4: 60-80cm (椅子2個)、5: 80-100cm (椅子2個半)、6: 100cm以上 (椅子3個以上)

図表2から、異性の人といる時に気楽に感じる距離については、親密感の高いグループである「親、兄弟・姉妹、友人、親しい知り合い」との距離は相対的に短く、親密感の薄いグループである「普通の知り合いや全く知らない人」との距離は相対的に長くとられていることがわかる。さらに、どのような間柄の場合であっても、若干の差ではあるが、年上の人との距離より年下の人との距離が少し短くとられており、パーソナル・スペースが狭いことが分かる。また、当然のことながら、パートナーとしての異性の「友人」との間のパーソナル・スペースがもっとも狭く、気楽に感じる距離が短いことが分かる。また、「兄弟・姉妹」や「親」といった家族に対するパーソナル・スペースより、「親しい知り合い」との間のパーソナル・スペースが狭く、気楽に感じる距離がより短いという結果は注目に値する。さらに、「年下の普通の知り合い」との間で気楽に感じる距離が、家族である異性の「親」との間で気楽に感じる距離よりも短いことにも注目したい。以下では、図表2の調査結果を、異なる相手ごとにさらに詳しく考察していくことにする。

まず、異性の「友人」の場合から取り上げてみよう(図表3)。パートナーとしての異性の「友人」といる時に気楽に感じる距離として、「0-20cm」を選んだ人が121名(64.4%)である。この割合は、異性のみならず同性に対する項目をもすべて含めても、今回の調査においてもっとも高い割合となっている。これに「20-40cm」と答えた39名(20.7%)を含めると、調査対象となった188名のうちの実に85.1%にも及ぶ人が椅子1個分(20-40cm)以内までの距離が、パートナーとしての異性の「友人」と隣にいるときに気楽に感じる距離であると認識していることになる。パートナーとしての異性の「友人」に対するパーソナル・スペースは他の相手との間でとられるパーソナル・スペースよりも明らかに狭く、その分、気楽に感じられる距離が近いことを表している。

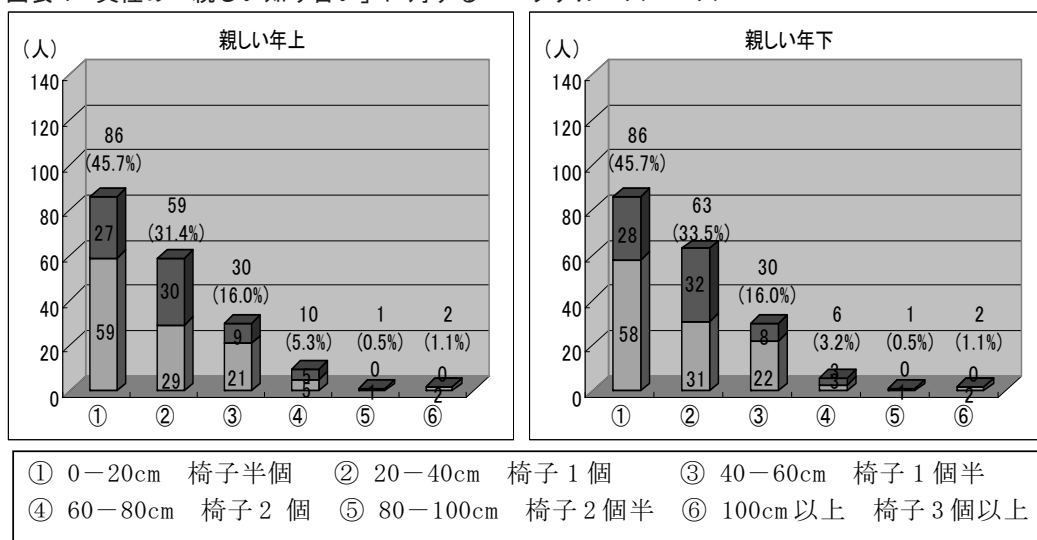
図表3 パートナーとしての異性の「友人」に対するパーソナル・スペース



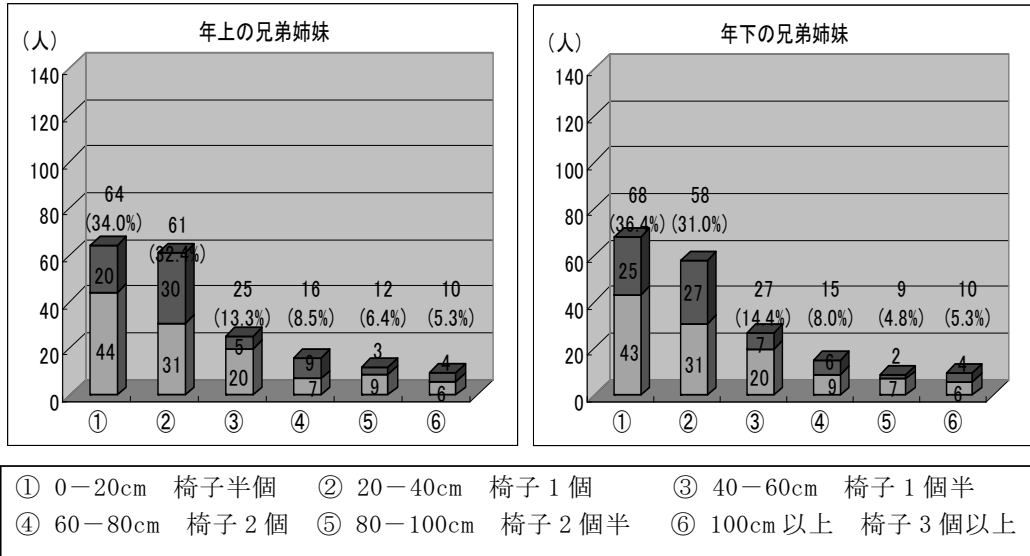
注) 棒グラフの上段は「女子」の数、下段は「男子」の数をそれぞれ表している。以下、同じ。

次に、異性の「親しい知り合い」については、図表4のような結果が出ている。すなわち、年上の「親しい知り合い」という時に気楽に感じる距離として、「0-20cm」と答えた人は86名(45.7%)で、「20-40cm」の距離が気楽であると答えた人も59名(31.4%)である。年下の「親しい知り合い」という時に気楽に感じる距離としては、「0-20cm」と答えた人が86名(45.7%)で、「20-40cm」の距離が気楽であると答えた人が63名(33.5%)であった。「親しい知り合い」に対するパーソナル・スペースの場合、年上や年下に対してほとんど違いはなく、5割に近い学生が「0-20cm」の距離を気楽に感じる距離として答えている。結果的に、パートナーとしての異性の「友人」に次いでパーソナル・スペースが狭くなっている。気楽に感じる距離を椅子1個分(20-

図表4 異性の「親しい知り合い」に対するパーソナル・スペース



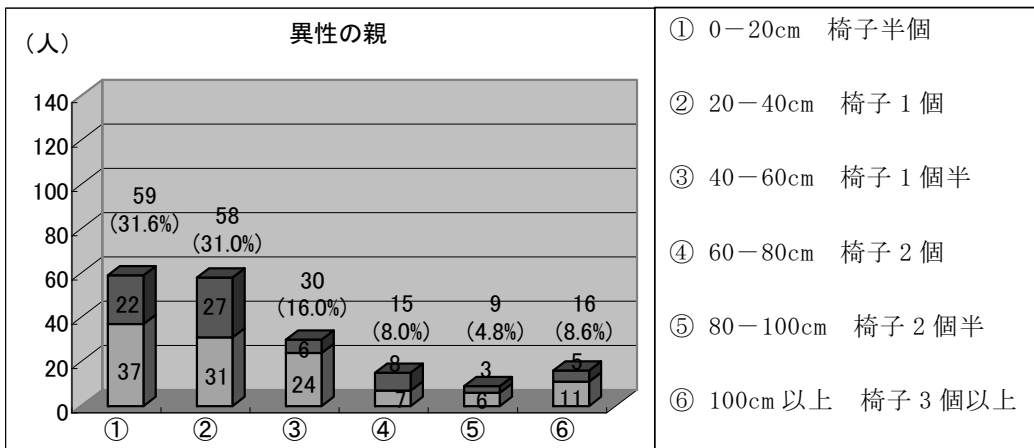
図表5 異性の「兄弟・姉妹」に対するパーソナル・スペース



40cm)まで広げると、8割弱の人がここに含まれ、異性の「親しい知り合い」との間で気楽に感じる距離がかなり短いことを表している。同性と異性の全ての相手項目を考慮した場合でも、パートナーとしての異性の「友人」に次いで気楽に感じる距離が短く、パーソナル・スペースがかなり狭いことがうかがえる。

次に、異性の年上の「兄弟・姉妹」との間で気楽に感じる距離について考察してみよう(図表5)。「0-20cm」と答えた人は64名(34.0%)で、「20-40cm」の距離が気楽であると答えた人が61名(32.4%)であった。また、年下の「兄弟・姉妹」との間で気楽に感じる距離の場合は、「0-20cm」と答えた人は68名(36.4%)で、「20-40cm」の距離が気楽であると答えた人が58名(31.0%)で

図表6 異性の「親」に対するパーソナル・スペース



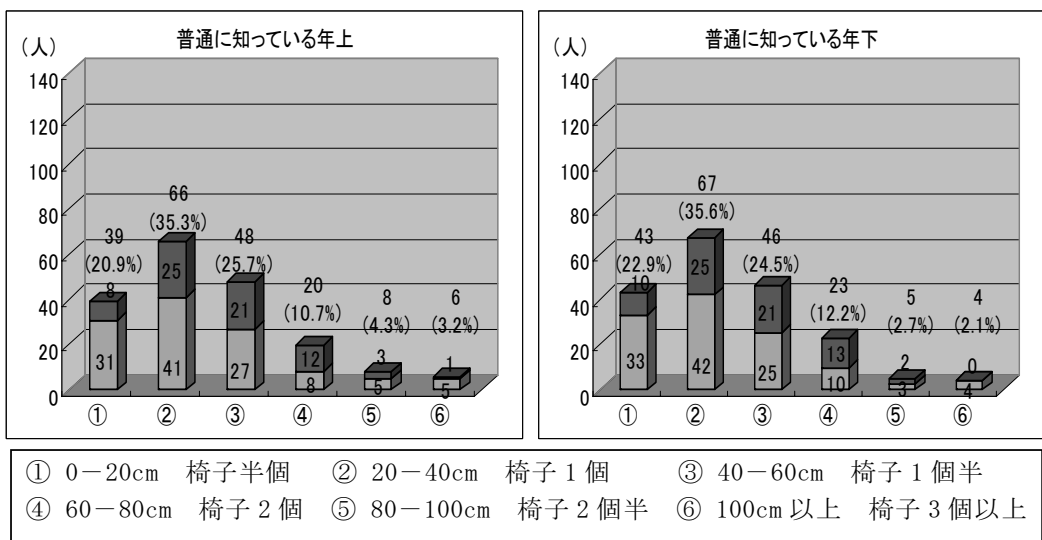
あり、異性の「兄弟・姉妹」との間で気楽に感じる距離としては、概ね7割近い人が椅子1個分(20-40cm)までと答えていることになる。パートナーとしての異性の「友人」や異性の「親しい知り合い」の場合と比べると、全体的に気楽に感じる距離が若干長くとられているといえよう。

異性の「親」との間で気楽に感じる距離については、「0-20cm」と答えた人と「20-40cm」と答えた人がほぼ同じで、この2つを合わせると6割強に上る(図表6)。異性の「親」に対するパーソナル・スペースもまた狭いといえよう。

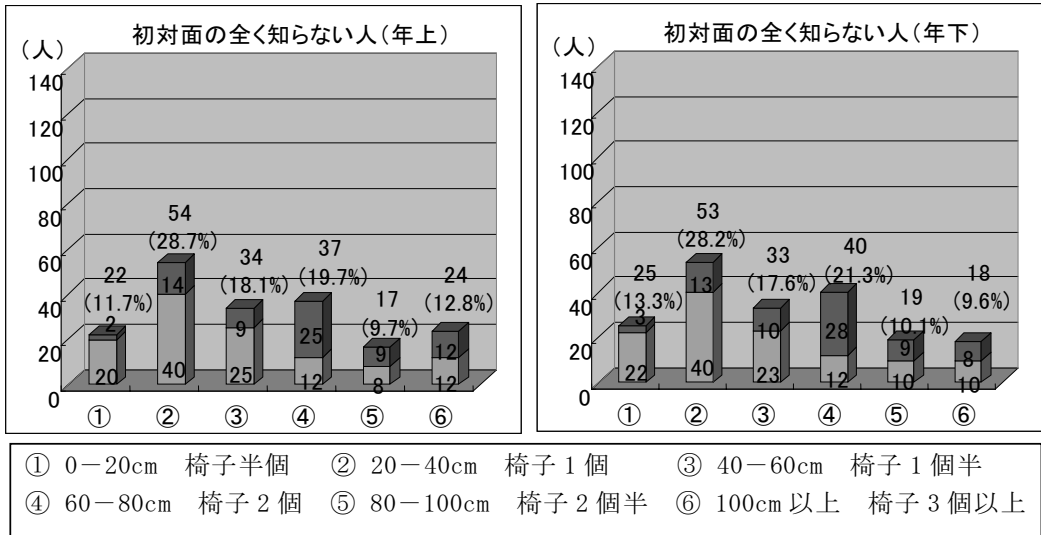
以上の結果をまとめると、韓人大学生において、親密感の高いグループの異性の人といる時に気楽に感じる距離は概ね「0-20cm」から「20-40cm」の距離であるといえる。さらに、パートナーとしての異性の「友人」との間でパーソナル・スペースがもっと狭く、異性の「親しい知り合い」、異性の「兄弟・姉妹」、異性の「親」の順に気楽に感じる距離が少しずつ長くなり、パーソナル・スペースが少しずつ拡大する傾向がうかがえる。こうした結果は、後述するように、親密感の薄いグループに属する「普通の知り合い」や「初対面の全く知らない人」との間で気楽に感じる距離を調査した結果とはかなり異なるものである。

まず、異性の年上の「普通の知り合い」との間で気楽に感じる距離の場合(図表7)、「0-20cm」と答えた人は39名(20.9%)に過ぎず、「20-40cm」の距離が気楽であると答えた人が66名(35.3%)でもっとも高い比率を占めている。次に多いのは、「40-60cm」の距離で、48名(25.7%)がこれに該当している。「60-80cm」が気楽であると答えた人も20名(10.7%)いた。一方、異性の年下の「普通の知り合い」との間で気楽に感じる距離を測定した結果でも、「0-20cm」と答えた人は43名(22.9%)に過ぎず、「20-40cm」の距離が気楽であると答えた人が67名(35.6%)でもっとも高い比率を占めた。さらに「40-60cm」の距離が気楽であると答えた人が46名(24.5%)、「60-80cm」が気楽であると答えた人も23名(12.2%)いた。分布的には左側に偏っているものの、親密感の高いグループの場合に比べパーソナル・スペースが広がり、気楽に感じる距離に対する回答の分布にも広がりを見せている。

図表7 異性の「普通の知り合い」に対するパーソナル・スペース



図表 8 異性の「初対面の全く知らない人」に対するパーソナル・スペース



次に、年上に見える異性の「初対面の全く知らない人」との間で気楽に感じる距離について調査した結果をみてみよう(図表8)。「0-20cm」と答えた人は22名(11.7%)で、「20-40cm」の距離が気楽であると答えた人は54名(28.7%)であった。また、「40-60cm」の距離が気楽であると答えた人は34名(18.1%)、「60-80cm」が気楽であると答えた人も37名(19.7%)、そして「80-100cm」や「100cm以上」が気楽であると答えた人もそれぞれ17名(9.7%)と24名(12.8%)いた。一方、年下に見える異性の「初対面の全く知らない人」との間で気楽に感じる距離についても、「0-20cm」と答えた人は25名(13.3%)と少なく、「20-40cm」や「60-80cm」を中心に回答が分散している。こうした結果から、「初対面の全く知らない人」との間で気楽に感じる距離は、「普通の知り合い」との間で気楽に感じる距離よりもさらに長いことがうかがえる。

なお、これら異性との間で気楽に感じる距離についての回答を男女別に分けて分析した結果、「初対面の全く知らない人」との間以外では、男女間の差はほとんど見られなかった。「初対面の全く知らない人」との間で気楽に感じる距離については、図表9にみるように、男女の間でパーソナル・スペースに有意な差が認められた(有意水準 0.1%)。

「初対面の全く知らない」人に対するパーソナル・スペースを男女別にさらに詳しく集計したの

図表 9 異性の「初対面の全く知らない人」に対するパーソナル・スペースの男女差

	男子		女子		t	p
	n	平均 (標準偏差)	n	平均 (標準偏差)		
初対面の全く知らない 年上の異性 ***	117	2.86 (1.525)	71	3.86 (1.407)	-4.557	0.000
初対面の全く知らない 年下の異性 ***	117	2.81 (1.514)	71	3.72 (1.333)	-4.291	0.000

注) *** p < 0.001

図表10 異性の年上の「初対面の全く知らない人」に対するパーソナル・スペース

	0-20cm 椅子0.5個	20-40cm 椅子1個	40-60cm 椅子1.5個	60-80cm 椅子2個	80-100cm 椅子2.5個	100cm以上 椅子3個以上	合計
男 度数	20	40	25	12	8	12	117
男 %	17.1%	34.2%	21.4%	10.3%	6.8%	10.3%	100%
女 度数	2	14	9	25	9	12	71
女 %	2.8%	19.7%	12.7%	35.2%	12.7%	16.9%	100%
合 度数	22	54	34	37	17	24	188
計 %	11.7%	28.7%	18.1%	19.7%	9.0%	12.8%	100%

注) 性別不明の1名を集計から外し、合計188名に対して100%比率を計算している。以下、同じ。

図表11 異性の年下の「初対面の全く知らない人」に対するパーソナル・スペース

	0-20cm 椅子0.5個	20-40cm 椅子1個	40-60cm 椅子1.5個	60-80cm 椅子2個	80-100cm 椅子2.5個	100cm以上 椅子3個以上	合計
男 度数	22	40	23	12	10	10	117
男 %	18.8%	34.2%	19.7%	10.3%	8.5%	8.5%	100%
女 度数	3	13	10	28	9	8	71
女 %	4.2%	18.3%	14.1%	39.4%	12.7%	11.3%	100%
合 度数	25	53	33	40	19	18	188
計 %	13.3%	28.2%	17.6%	21.3%	10.1%	9.6%	100%

が図表10と図表11である。この2つの図表によると、男子学生より女子学生のほうがパーソナル・スペースが広いことが分かる。「初対面の全く知らない人」との間で気楽に感じる距離について、女子学生の方は椅子1個（20-40cm）から椅子3個以上（100cm以上）の範囲内ではらついており、結果的に広い距離をとっていることがうかがえる。

3.3 同性の相手に対するパーソナル・スペース

図表11までは、異性の相手に対する調査結果を分析してきたが、ここからは同性の多様な関係にある相手を対象に、その相手と一緒にいる時、気楽に感じる距離について調査した結果を考察する。同性の相手ごとに平均値と標準偏差を求めたところ、図表12のような結果が得られた。

同性の人に対するパーソナル・スペースの調査結果（図表12）によると、「親」（異性 2.49、同性 2.42）や「兄弟・姉妹」（異性年上 2.37、同性年上 2.37；異性年下 2.30、同性年下 2.32）といった家族以外では、異性の人という時よりも同性の人という時の方が気楽に感じる距離はやや長いという結果が出ている。また、異性の人に対してはほとんど男女差が無かったものの、同性の人に対しては男女差がはっきりと表れている。同性の人との距離が長くとられていることは、おそらく男子学生の割合が高かったことにも起因している。このことについては、各相手別の詳細な分析時に見ていくことにする。

また、同性の人との間でとられるパーソナル・スペースについては、異性の他人との場合と同じく、親密感の高いグループの方がパーソナル・スペースは狭いことが分かる。回答の分布を分析してみると、「親」「兄弟・姉妹」「友人」「親しい知り合い」との間で気楽に感じる距離は概ね椅子半個（0-20cm）から椅子1個（20-40cm）までの短い距離であるという回答が多く、親密感の薄

図表12 同性の人といる時に気楽に感じる距離

同性の相手	平均値	標準偏差	n	グループ分け
親	2.42	1.568	189	親密感の 高いグループ
年上の兄弟・姉妹	2.37	1.544	189	
年下の兄弟・姉妹	2.32	1.543	189	
友人（パートナーか親友）	2.02	1.393	189	
年上の親しい知り合い	2.18	1.391	188（欠損1）	
年下の親しい知り合い	2.14	1.390	188（欠損1）	
年上の普通の知り合い	2.85	1.445	189	親密感の 薄いグループ
年下の普通の知り合い	2.81	1.453	189	
年上の全く知らない人	3.49	1.616	189	
年下の全く知らない人	3.43	1.568	189	

注) 尺度は、次のような6ポイント・スケールを用いている。以下、同じ。

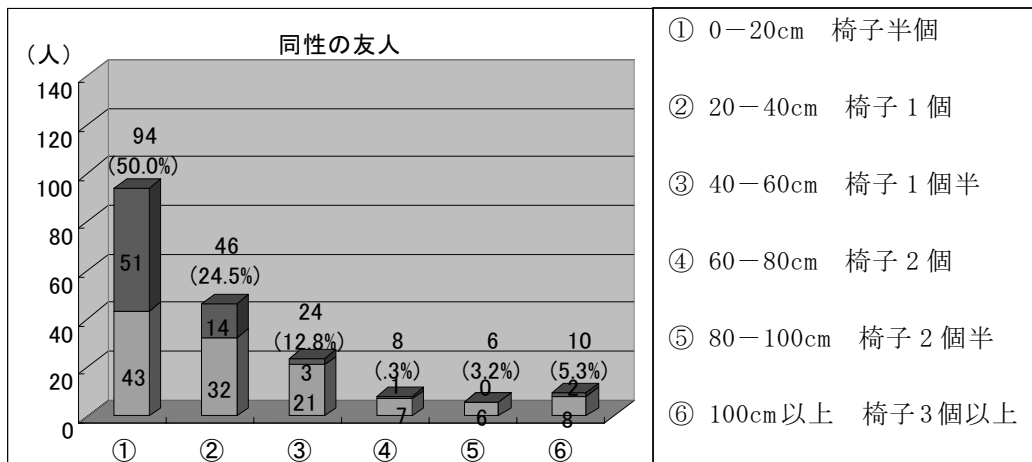
- 1: 0-20cm（椅子半個）、2: 20-40cm（椅子1個）、3: 40-60cm（椅子1個半）、
- 4: 60-80cm（椅子2個）、5: 80-100cm（椅子2個半）、6: 100cm以上（椅子3個以上）

いグループである「普通の知り合い」や「初対面の全く知らない人」との間で気楽に感じる距離は、椅子1個（20-40cm）から椅子2個（60-80cm）ほどの長い距離であるという回答が多くなっている。さらに、同性のいかなる相手との場合においても、年上の人との距離より年下の人との距離が少々短くとられていることが分かる。

相手ごとの特徴としては、同性の人といる時に気楽に感じる距離の中でも、同性の「友人」という時に気楽に感じる距離がもっとも短く（平均値 2.02）、同性の「友人」に対するパーソナル・スペースがとりわけ狭いことがうかがえる。また、同性の「親しい知り合い」との間で気楽に感じる距離が、同性の「兄弟・姉妹」や同性の「親」といった家族といる時に気楽に感じる距離よりも短くなっていることには注目すべきである。以下では、同性の各相手別により詳細な分析を試みたい。

まず、同性の「友人」の場合、気楽に感じる距離として、「0-20cm」と答えた人が94名で、回

図表13 同性の「友人」に対するパーソナル・スペース（1）



図表14 同性の「友人」に対するパーソナル・スペース（2）

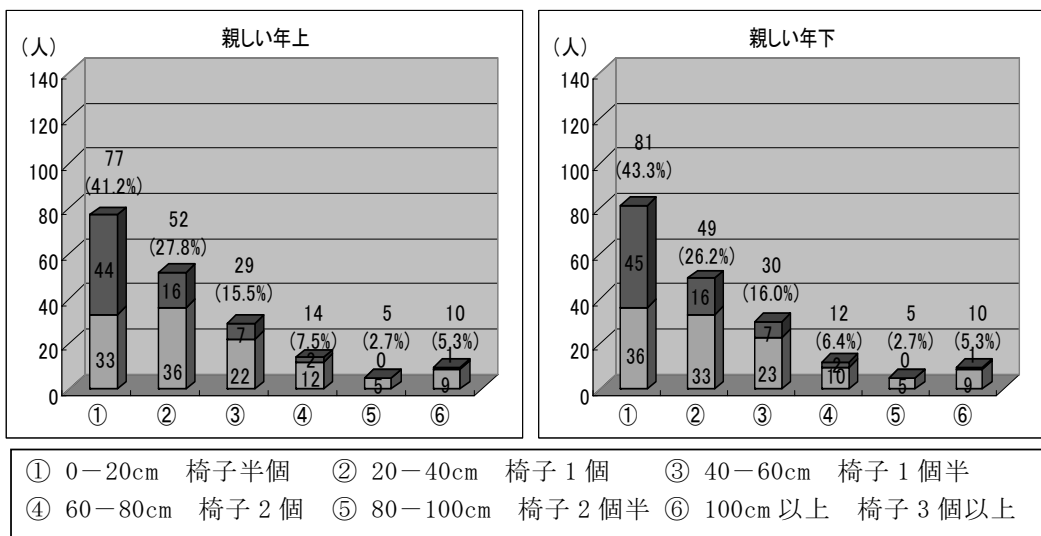
	0-20cm 椅子0.5個	20-40cm 椅子1個	40-60cm 椅子1.5個	60-80cm 椅子2個	80-100cm 椅子2.5個	100cm以上 椅子3個以上	合計
男 度数 %	43 36.8%	32 27.4%	21 17.9%	7 6.0%	6 5.1%	8 6.8%	117 100%
女 度数 %	51 71.8%	14 19.7%	3 4.2%	1 1.4%	0 .0%	2 2.8%	71 100%
合 度数 計 %	94 50.0%	46 24.5%	24 12.8%	8 4.3%	6 3.2%	10 5.3%	188 100%

答者の半分を占めている（図表13）。同性の「友人」に対するパーソナル・スペースが非常に狭いことを物語っている。「20-40cm」の距離が気楽であると答えた人は46名（24.5%）で、この2つを合わせると、188名のうちの実に4分の3の人が同性の「友人」との間で気楽に感じる距離が椅子1個分（20-40cm）以内であると答えていることになる。

さらに、図表14に見るように、同性の友人に対するパーソナル・スペースには男女の間でかなりの差がみられる。男子学生の場合、「0-20cm」と「20-40cm」の回答を合わせて6割を超えるが、女子学生の場合はずっとも短い「0-20cm」だけで7割を超えており、女子学生のパーソナル・スペースが男子学生のそれより狭いことがうかがえる。このような男女差は統計的にも有意と認められた（有意水準 0.1%，図表25参照）。

次に、同性の年上の「親しい知り合い」の場合、気楽に感じる距離としては、「0-20cm」と答えた人が77名（41.2%）で、「20-40cm」と答えた人は52名（27.8%）であった（図表15）。一方、同性の年下の「親しい知り合い」との間では、「0-20cm」が81名（43.3%）、「20-40cm」が49名（26.2%）であった。「親しい知り合い」の場合、相手が年上か年下かというのはあまり関係がなく、概ね7割弱の人が椅子1個分（20-40cm）までの距離が気楽に感じる距離であると答えたことに

図表15 同性の「親しい知り合い」に対するパーソナル・スペース



図表16 同性の年下の「親しい知り合い」に対するパーソナル・スペース

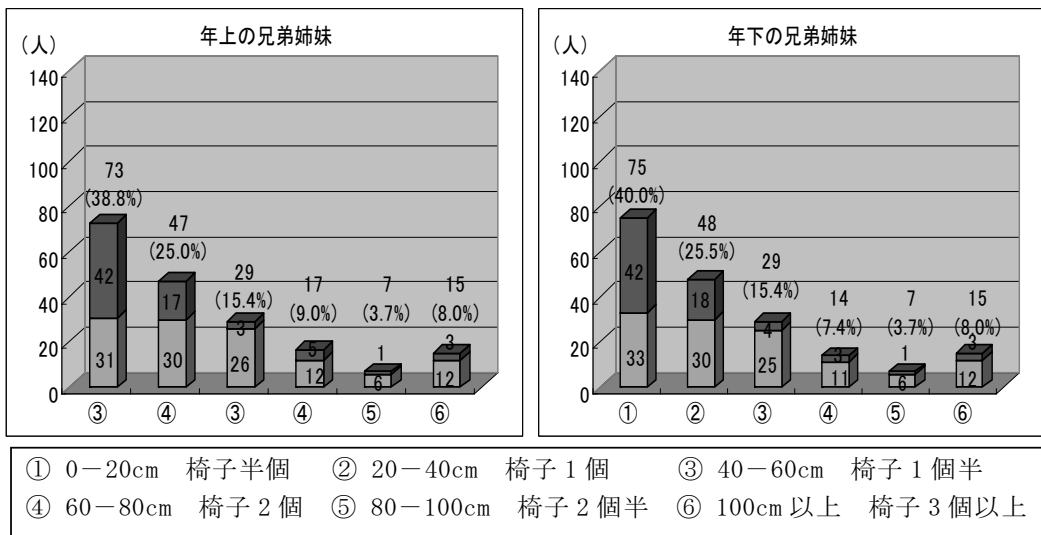
	0-20cm 椅子0.5個	20-40cm 椅子1個	40-60cm 椅子1.5個	60-80cm 椅子2個	80-100cm 椅子2.5個	100cm以上 椅子3個以上	合計
男 度数 %	36 31.0%	33 28.4%	23 19.8%	10 8.6%	5 4.3%	9 7.8%	116 100%
女 度数 %	45 63.4%	16 22.5%	7 9.9%	2 2.8%	0 .0%	1 1.4%	71 100%
合 度数 計 %	81 43.3%	49 26.2%	30 16.0%	12 6.4%	5 2.7%	10 5.3%	187 100%

なる。このような結果を踏まえると、同性の「親しい知り合い」とのパーソナル・スペースは、異性の「親しい知り合い」とのパーソナル・スペース（0-40cmまでで8割弱）より広いといえる。さらに、図表16に見るように、同性の年下の「親しい知り合い」に対するパーソナル・スペースにおいては、女子が男子よりパーソナル・スペースが狭い傾向にあり、統計的にも男女間の有意差が検証された（有意水準 0.1%、図表25参照）。

次に、同性の年上の「兄弟・姉妹」の場合（図表17）、気楽に感じる距離として「0-20cm」と答えた人は73名（38.8%）で、「20-40cm」と答えた人が47名（25.0%）であった。一方、同性の年下の「兄弟・姉妹」との間で気楽に感じる距離としては、「0-20cm」を選んだ人は75名（40.0%）で、「20-40cm」の距離が気楽であると答えた人が48名（25.5%）である。6割を大幅に超える人数が椅子1個分（20-40cm）以内の距離を気楽に感じる距離であると答えており、かなりパーソナル・スペースが狭いことがうかがえる。

また、図表18に見るように、「兄弟・姉妹」に対するパーソナル・スペースにおいては、女子学生が男子学生よりパーソナル・スペースが狭い傾向にあり、その違いは統計的にも有意であった（有意水準 0.1%、図表25参照）。

図表17 同性の「兄弟・姉妹」に対するパーソナル・スペース

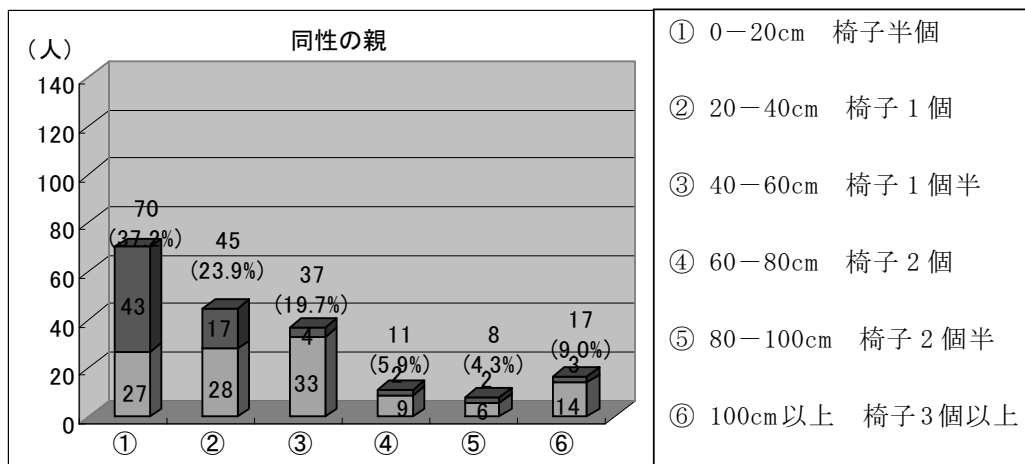


図表18 同性の年下の「兄弟・姉妹」に対するパーソナル・スペース

	0-20cm 椅子0.5個	20-40cm 椅子1個	40-60cm 椅子1.5個	60-80cm 椅子2個	80-100cm 椅子2.5個	100cm以上 椅子3個以上	合計
男 度数 %	33 28.2%	30 25.6%	25 21.4%	11 9.4%	6 5.1%	12 10.3%	117 100%
女 度数 %	42 59.2%	18 25.4%	4 5.6%	3 4.2%	1 1.4%	3 4.2%	71 100%
合 度数 計 %	75 39.9%	48 25.5%	29 15.4%	14 7.4%	7 3.7%	15 8.0%	188 100%

次に、同性の「親」という時に気楽に感じる距離について考察してみたい(図表19)。これについては、「0-20cm」と答えた人が70名(37.2%)で、「20-40cm」を選んだ人が45名(23.9%)であった。この2つを合わせると、椅子1個分(20-40cm)以内の距離が気楽であると答えた人が概ね6割強となる。こうした結果は、異性の「親」の場合(6割強)とあまり変わらない。但し、最短距離である「0-20cm」のみを取り上げてみると、同性の「親」のほうの比率がより高くなっ

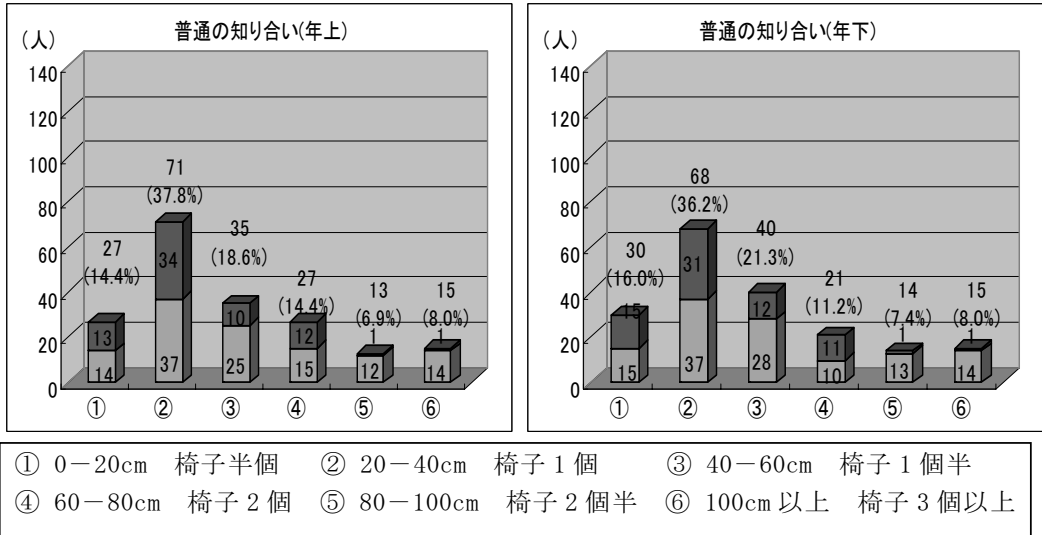
図表19 同性の「親」に対するパーソナル・スペース(1)



図表20 同性の「親」に対するパーソナル・スペース(2)

	0-20cm 椅子0.5個	20-40cm 椅子1個	40-60cm 椅子1.5個	60-80cm 椅子2個	80-100cm 椅子2.5個	100cm以上 椅子3個以上	合計
男 度数 %	27 23.1%	28 23.9%	33 28.2%	9 7.7%	6 5.1%	14 12.0%	117 100%
女 度数 %	43 60.6%	17 23.9%	4 5.6%	2 2.8%	2 2.8%	3 4.2%	71 100%
合 度数 計 %	70 37.2%	45 23.9%	37 19.7%	11 5.9%	8 4.3%	17 9.0%	188 100%

図表21 同性の「普通の知り合い」に対するパーソナル・スペース



ており、同性の「親」に対してはパーソナル・スペースが相対的に小さいといえよう。

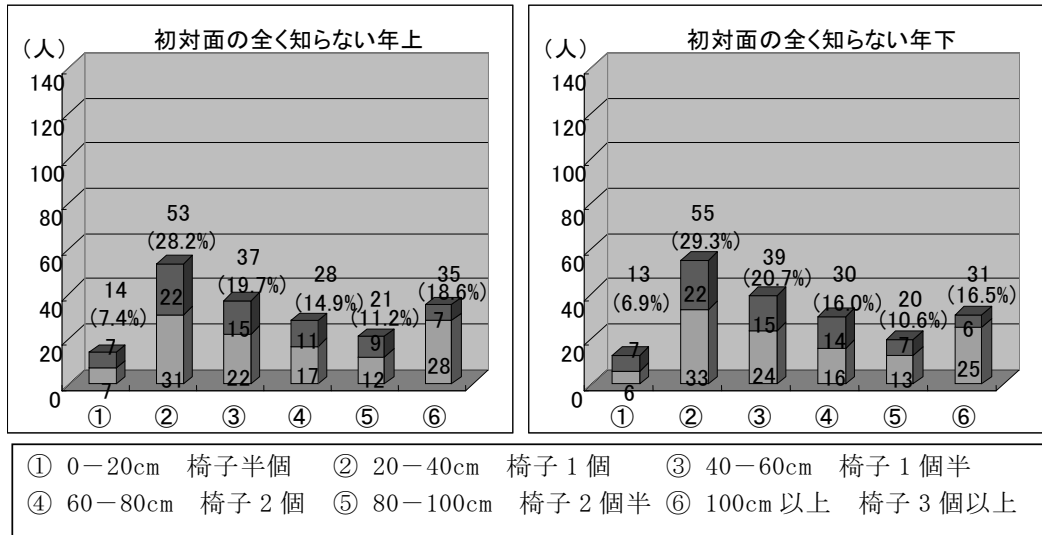
さらに、図表20に見るように、同性の「親」に対するパーソナル・スペースについては、女子学生が男子学生よりパーソナル・スペースが狭い傾向にあり、統計的に男女の間で有意な差が示された。女子学生の場合、最短距離である「0-20cm」を選んだ人が60.6%もいるのに対し、男子学生では23.1%に過ぎず、男子学生の場合はむしろ「椅子1個半」(60cm)までのやや広い範囲に分布が分散している。女子学生に比べ男子学生のパーソナル・スペースが広いことを物語っている。

一方、「普通の知り合い」の場合には気楽に感じる距離がばらついていることが分かる(図表21)。年上と年下に対して、「0-20cm」が気楽な距離であると答えた人は各々27名(14.4%)と30名(16.0%)に過ぎず、「20-40cm」の距離が気楽であると答えた人が71名(37.8%)と68名(36.2%)でもっとも高い比率を占めた。また、「40-60cm」の距離が気楽であると答えた人も35名(18.6%)と40名(21.3%)となっている。さらに、「60-80cm」が気楽に感じる距離であると答えた人は27名と21名であり、各々14.4%と11.2%を占めている。「普通の知り合い」に対するパーソナル・スペースでは、概ね椅子2個(60-80cm)までが気楽に感じられる距離であるといえよう。

図表22 同性の年下の「普通の知り合い」に対するパーソナル・スペース

	0-20cm 椅子0.5個	20-40cm 椅子1個	40-60cm 椅子1.5個	60-80cm 椅子2個	80-100cm 椅子2.5個	100cm以上 椅子3個以上	合計
男 度数	15	37	28	10	13	14	117
男 %	12.8%	31.6%	23.9%	8.5%	11.1%	12.0%	100%
女 度数	15	31	12	11	1	1	71
女 %	21.1%	43.7%	16.9%	15.5%	1.4%	1.4%	100%
合 度数	30	68	40	21	14	15	188
合 %	16.0%	36.2%	21.3%	11.2%	7.4%	8.0%	100%

図表23 同性の「初対面の全く知らない人」に対するパーソナル・スペース



もともと、この場合においても、年上と年下に対するパーソナル・スペースに大きな違いは見られないものの、女子学生のほうが男子学生よりパーソナル・スペースが相対的に狭くなっている(図表22)。女子学生の場合は、椅子1個(20-40cm)の距離に回答が集中(43.7%)しているが、男子学生の場合はかなり回答がばらついており、ここでも男女の間に統計的に有意な差が検証された(有意水準 0.1%, 図表25参照)。

最後に、「初対面の全く知らない人」に対しては、パーソナル・スペースがかなり広くとられていることが推察される(図表23)。具体的には、年上の「初対面の全く知らない人」という時に気楽に感じる距離として、「0-20cm」と答えた人は14名(7.4%)に過ぎず、「20-40cm」の距離が気楽であると答えた人は53名(28.2%)であった。他にも、「40-60cm」が37名(19.7%)、「60-80cm」が28名(14.9%)、「80-100cm」が21名(11.2%)、そして「100cm以上」と答えた人も35名(18.6%)である。相手が年下の場合であっても結果に大きな違いは見られない。

また、図表24から、同性の「初対面の全く知らない人」に対しても、男子学生より女子学生のほうがパーソナル・スペースが狭い傾向にあり、男女間の差は統計的にも有意であった(有意水準 5

図表24 同性の年下の「初対面の全く知らない人」に対するパーソナル・スペース

	0-20cm 椅子0.5個	20-40cm 椅子1個	40-60cm 椅子1.5個	60-80cm 椅子2個	80-100cm 椅子2.5個	100cm以上 椅子3個以上	合計
男 度数	6	33	24	16	13	25	117
男 %	5.1%	28.2%	20.5%	13.7%	11.1%	21.4%	100%
女 度数	7	22	15	14	7	6	71
女 %	9.9%	31.0%	21.1%	19.7%	9.9%	8.5%	100%
合 度数	13	55	39	30	20	31	188
計 %	6.9%	29.3%	20.7%	16.0%	10.6%	16.5%	100%

図表25 同性の相手に対するパーソナル・スペースの男女差

同性の相手	男子		女子		t	p
	n	平均 (標準偏差)	n	平均 (標準偏差)		
年上の全く知らない人*	117	3.68 (1.664)	71	3.20 (1.499)	2.069	.040
年下の全く知らない人*	117	3.62 (1.623)	71	3.14 (1.437)	2.089	.038
年上の普通の知り合い***	117	3.14 (1.553)	71	2.39 (1.102)	3.823	.000
年下の普通の知り合い***	117	3.09 (1.565)	71	2.37 (1.111)	3.718	.000
年上の親しい知り合い***	117	2.55 (1.488)	70	1.59 (0.955)	5.376	.000
年下の親しい知り合い***	116	2.50 (1.501)	71	1.58 (0.951)	5.145	.000
友人***	117	2.36 (1.494)	71	1.46 (0.998)	4.915	.000
親***	117	2.84 (1.586)	71	1.76 (1.292)	5.075	.000
年上の兄弟・姉妹***	117	2.73 (1.579)	71	1.80 (1.305)	4.340	.000
年下の兄弟・姉妹***	117	2.68 (1.602)	71	1.76 (1.259)	4.348	.000

注) * $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$ 、*** $p < 0.001$

%, 図表25参照)。とりわけ、「100cm以上」と答えた男子学生の比率が2割を超えていることには注目すべきであろう。

図表25は、同性の相手との間で気楽に感じる距離について、性別による違いをまとめたものである。すべての相手に対して統計的に有意な男女差が出ている。とりわけ、「初対面の全く知らない人」を除くすべての相手に対して、男女間には0.1%水準で有意な差が認められた。すなわち、同性の相手に対しては、明らかに女子学生のほうがパーソナル・スペースが狭いといえよう。

4 むすび

本研究では、韓国人大学生を対象に、同性や異性の相手に対するパーソナル・スペースの調査を行った。特に、パーソナル・スペースが狭いとされる20歳前後の人を対象に、同性や異性の相手といる時に気楽に感じる距離を測ることで、その相手との親密度合いによってパーソナル・スペースの広さが異なることを明らかにした。調査結果に基づき、親密な間柄であるか否かに関わらず調査対象の全ての相手に対して、年上の人より年下の人に対してパーソナル・スペースが相対的に狭いことも確認された。また、異性に対するパーソナル・スペースにおいては男女間の差はほとんど見られなかったものの、同性に対するパーソナル・スペースにおいては男女間でかなりの差が出ており、男子より女子の方がパーソナル・スペースが狭いことを検証することができた。

さらに、パートナーとしての異性の「友人」に対するパーソナル・スペースがもっとも狭く、次いで異性の「親しい知り合い」、同性の「友人」の順にパーソナル・スペースが拡大していく傾向も読みとれた。一方、年上に見える「初対面の全く知らない人」との間のパーソナル・スペースがもっとも広くとられていることが確認されたが、全体的にはパーソナル・スペースが狭い傾向にあり、このことを韓国人大学生の特徴として挙げることができよう。

今後、日本人大学生や中国あるいはアメリカの大学生を対象にパーソナル・スペースを調査し、韓国人大学生との比較を行うことで、パーソナル・スペースの文化間の相違を検証していきたいと考えている。本研究によって得られた結果は、韓国人のパーソナル・スペースの理解に大いに貢献できるものである。たとえば、韓国人とのコミュニケーションの場面において、本研究の結果やインプリケーションを活かすことで、気楽に感じる距離を維持しながらよりスムーズな異文化コミュ

ニケーションが実現できるであろう。本研究により、異文化コミュニケーションに関する理解が深まり、多くのコミュニケーション・トラブルが解消され、多文化共生時代の異文化理解がさらに促進されることを期待している。

参 考 文 献

- Hall, E. T. (1966) *The Hidden Dimension*, Doubleday and Company. (日高敏隆・佐藤信行訳『かくれた次元』みすず書房, 1970年)
- Hall, E. T. (1976) *Beyond Culture*, Anchor Books, 1976. (岩田慶治・谷泰訳『文化を超えて』TBSブリタニカ, 1979年)
- Hediger, H. (1983) *Wild Animals in Captivity*, Butterworth.
- Hofstede, G. (1983) "The Cultural Relativity of Organizational Practices and Theories", *Journal of International Business Studies*, Fall.
- Hofstede, G. (1985) "The Interaction between National and Organizational Value Systems [1]", *Journal of Management Studies*, 22:4, July.
- Hofstede, G. (1991) *Cultures and Organizations: Software of the Mind*, McGraw-Hill International, (岩井紀子・岩井八郎訳『多文化世界：違いを学び共存への道を探る』有斐閣, 1995年)
- 黒木雅子 (1996) 『異文化論への招待』朱鷺書房.
- 渋谷昌三 (1976) 「社会空間の基礎的研究」『心理学研究』(日本心理学会), Vol.47, No.3, pp.119-128.
- 渋谷昌三 (1985) 「パーソナル・スペースの形態に関する一考察」『山梨医大紀要』第2巻, pp.41-49.
- 渋谷昌三 (1987) 「対人距離の発達の変化に関する投影法的研究」『山梨医大紀要』第4巻, pp.52-61.
- 曹美庚 (2001) 「日本人と韓国人の異文化コミュニケーション」『人間環境学入門』中央経済社, pp.100-109.
- 曹美庚 (2004) 「消費者行動に見る文化的側面」『京都学園大学経営学部論集』14(1), pp.41-58.
- 曹美庚 (2008) 「スキンシップ許容度とコミュニケーション距離：日本人大学生の分析結果を中心に」『言語文化論究』(九州大学大学院言語文化研究院), No.23, pp.43-61.
- 曹美庚・李建 (2006) 「消費行動の比較と異文化理解：日本と韓国の大学生を中心に」『京都学園大学経営学部論集』16(1), pp.1-26.
- 鍋倉健悦 (1998) 『異文化間コミュニケーションへの招待：異文化理解から異文化との交流に向けて』北樹出版.
- 林吉郎 (1994) 『異文化インターフェイス経営』日本経済新聞社.
- 本名信行・秋山高二・竹下裕子・ベイツ・ホッフア (1994) 『異文化理解とコミュニケーション1：ことばと文化』三修社.
- 本名信行・秋山高二・竹下裕子・ベイツ・ホッフア (1994) 『異文化理解とコミュニケーション2：人間と組織』三修社.
- 村上征勝 (2002) 『文化を計る：文化計量学序説』朝倉書店.

八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美 (2001) 『異文化コミュニケーションワークブック』三修社.